

近代日本モダニズム芸術とファッションについての研究  
——1910年代—1930年代を中心に  
Modernism and Fashion in Japan 1910s -1930s

五十殿 利治\*1+, 滝沢 恭司\*2+, 鈴木 貴宇\*3+, 喜多 孝臣\*4+, 江口 みなみ\*5+  
Toshiharu Omuka\*1+, Kyoji Takizawa\*2+, Takane Suzuki\*3+, Takaomi Kita\*4+, Minami Eguchi\*5+

\*1 筑波大学芸術系 茨城県つくば市天王台 1-1-1  
Faculty of Art & Design, University of Tsukuba, 1-1-1 Tennodai,  
Tsukuba, Ibaraki, Japan

\*2 町田市立国際版画美術館  
Machida City Museum of Graphic Arts

3\* 東邦大学理学部  
Faculty of Science, Toho University

\*4 早稲田大学坪内博士演劇記念博物館  
Tsubouchi Memorial Theatre Museum, Waseda University

\*5 筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程  
Doctoral Program, Graduate School of Comprehensive Sciences, University of Tsukuba

\*服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化学園大学  
Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture  
Bunka Fashion Research Institute, Bunka Gakuen University

Abstract: The purpose of this joint research is to examine the image of “Artist” in modern Japan, an image which was different from traditional literati and imported from West just like the Art itself. Late Meiji and early Taisho period saw a surge of modernism in art and literature in Japan and special attention is paid to the significance of artists’ fashion including “nude”. Major modernists in the 1920s and the 1930s such as Ryusei Kishida, Kaita Murayama, Kyojiro Hagiwara, Tomoyoshi Murayama and so on were multi-talented and transcended traditional boundaries of genres of arts and some of them attracted public attention for their fashion and thus were widely publicized as a fashion leader. These no doubt contributed to the formation of the general image of “Artist”. Our purpose is to investigate modern fashion in terms of general art(s) history, taking into consideration western original models and its transformations in modern Japan, its reception of general public and so on.

Though not every aim of this joint research set initially up has attained, our researches for them have been steadily done. It is noteworthy that taking up as a subject of joint research work “separate” phenomena hitherto seen in histories of art and literature, each member of this research group and participants in its seminar as well came to grasp social and historical significances of close relations

---

\*1) Omuka@geijutsu.tsukuba.ac.jp

between fashion and creative activities of artists and literary figures.

The most important and common view we shared as a conclusive understanding in our researches should be summarized: as Prof. Toby Slade pointed out at one of our seminars, fashion in modern Japan was as an aesthetic and social phenomenon or cultural institution rather than a practical utilitarian tool of life. That is the reason why we have discussed clothes of Artist (among others) as a way of artistic expression with social significance. The other aspect we should like to emphasize in our joint research is that we have considered the fashion in modern Japan in terms of viewpoints from within and without, that is, on and/or from Europe and America and pre-war Asian colonies.

Here are our main subjects that members of this joint research have taken up respectively: 1) Tomoyoshi Murayama in “Bubikopf” (*okappa* or bobbed hair style) wore a knit cap and a *Rubashka* or Russian blouse and these made Murayama famous as an artist and a fashion leader. 2) Women moved in the society with bobbed hair and in western clothes when female writers in the early Showa era such as Chiyo Uno and Fusa Sasaki were cutting-edge professional women. 3) Leftist painters in 1920s painted workers in so-called “Nappa-fuku” or blue work clothe and they themselves wore after factory workers and around 1930 young people such as “Marx Boy” and “Engels Girl” in blue-color clothe.

## 要旨

本研究は明治末・大正初頭以後のモダニズム芸術家のファッションが帯びた芸術的意義を検討することを目的としている。とくに昭和戦前期までの時代に着目するのはモダニズムの洗礼を受けた作家にはマルチな才能を、ジャンルを横断して発揮するものが少なくなかったからである。「ファッション・リーダー」としての芸術活動のスタイルが一般の「芸術家像」の形成のみならず、時代の突端に立つ者というイメージの形成に大きく関与したと考えられる。

初期の目標がすべて達成したとはいえないが、着実に研究課題を探求した。特筆したいことはこれまで美術や文学で「孤立」した現象とされたことが共同研究のテーマとして取り上げたことにより、共同研究員や研究会参加者によって、ファッションと美術家や文学者により創作活動との緊密な関係の社会的、歴史的な意義を認識するようになったことである。

さらに共同研究の成果として確認できたことを要約するならば、トビー・スレイド氏によって指摘されたことであるが、日本近代における、実用的な機能に限定されない、「美的」な社会的な存在、さらにいえば制度としてのファッションという視点である。美術家(に限られないが)の衣服が美的な表現として、そしてまた社会的な意義のあるものとして議論されることが可能となったといえる。いまひとつ、本研究は日本近代を対象として積極的に国外(欧米、そして旧植民地)への／からの視線を考慮して進めたことも強調しておきたい。

## 配当決定額

平成 22 年度	1,150,000 円
平成 23 年度	1,209,000 円
平成 24 年度	985,000 円
合計	3,344,000 円

## 研究目的

「美術」という概念が「書画」や「彫物」とは異なる近代の所産であったように、「美術家」のイメージも「文人」とは異なるものとして近代に成立したものであり、「美術」と分かちがたく、広く社会に流布している。本研究は明治末・大正初頭以後の日本におけるモダニズム芸術、とりわけ美術と文学を中心にして、「裸体」を含む芸術家のファッションが帯びた芸術的意義を検討することを目的としている。とくに昭和戦前期までの時代に着目するのは、明治末・大正初頭以降、岸田劉生、村山槐多から萩原恭次郎、村山知義に至るまで、モダニズムの洗礼を受けた作家にはマルチな才能をジャンルを横断して発揮するものが少なくなかったからである。「ファッション・リーダー」としてジャーナリズムによって喧伝される場合さえあった。つまり、その芸術活動のスタイルが一般の「芸術家像」の形成のみならず、時代の突端に立つ者（つまりアヴァンギャルド）というイメージの形成に大きく関与したと考えられる。

## 研究の計画

各年度の計画について略述する。

2010 年度:キックオフの年度であり、各研究者による研究の基本的な方向を確認し、共同研究のための基盤を整備する。グループ研究を実質化するために、神戸ファッション美術館に調査旅行を行いながら、研究対象、研究方法、資料収集等について議論を深める。研究会では指導助言者を招きながら、ファッション研究を深める。ドイツ調査旅行において資料収集のほか、研究者交流を予定。

2011 年度:基本方針に則して、個別研究ならびに共同研究を進める。海外からの研究者としては、Christine Guth (Royal College of Art, London)を予定する。指導助言者としては、川畑直道(デザイン史研究)、宮内淳子(帝塚山学院大学教授)を招いて、議論を深める。ドイツ調査旅行においては引き続き資料収集を継続し、とくにベルリンの美術館を中心に調査する。

2012 年度:基本方針に則して、個別研究ならびに共同研究を進める。海外からの招へい研究者としては、日本と関わりの深い東アジア近代美術での展開を視野に入れるため、中国の近代美術史研究者を予定する。また最後の年であるので、まとめの公開研究会を開催し、報告書を作成する。

## 研究の方法

各研究者はそれぞれ 1910 年代から 30 年代にかけて設定した年代とテーマについて掘り下げるとともに、不断に共同研究としてのテーマを念頭において研究活動を行う。また研究グループとしては、これまでの共同作業と各自の研究実績から、十分な成果を生み出せると期待できる。共同研究活動としては、年2回程度の研究会により、国内外の日本近代芸術研究者を招いて研究交流を行い、論文投稿や口頭発表により国際的な視野において研究成果を発信するように努める。

## 研究の成果

### [研究活動の経過]

2010年度は4回の研究会を開催した。平成22年7月23日筑波大学において、研究計画採択より前であるが、研究計画の細部や各自が主としてカバーする研究領域についての打合せを行った。ついで、11月3日、文化ファッション研究機構において、共同研究員全員と事務局と、研究体制、研究予算の執行計画等について打合せた。つぎに平成23年1月15日、筑波大学において、トビー・スレイド Toby Slade 氏(東京大学特任講師)とともに研究会を開催した。氏は *The Aesthetic Conceptualisation of Japanese Fashion* と題した英文ペーパーを用意し、話題提供を行った。氏の問題設定は、日本の近代ファッションの概念規定に関わるものであり、本研究にとっては背骨に相当する問題である。近代ファッションがなんであるかを抜きにして、「ファッション・リーダー」は論じられない。氏の主張を要約するならば、近代日本のファッションとは頑固なくらいに特異なものでありつづけたというものである。なぜならそれはなによりも「美的」だからである。こうした「美的」な社会的存在としてのファッションはきわめて示唆的である。

ついで、2月5日-6日、高島屋史料館、神戸ファッション美術館、兵庫県立美術館、芦屋市立美術博物館に共同の調査を行った。高島屋史料館では百貨店と美術家の関係について、神戸ファッション美術館においてはファッションにおけるマネキンの重要性について、兵庫県立美術館においては森村泰昌作品において著名な人物になり切る作品から身体表現としてファッションについて示唆を受けた。芦屋市立美術博物館において、神戸ファッション造形大学青木美保子氏による画家小出楯重のファッションへの関心とその背景についての講演を聴講した。

さらに2月19日には、筑波大学において、宮内淳子氏(帝塚山学院大学教授)とともに研究会を開催した。宮内氏の話題提供は「宇野千代『色ざんげ』をファッションから読む」というものであり、画家東郷青児と一時同棲した宇野千代をめぐる、東郷をモデルとした小説「色ざんげ」におけるファッションを、色彩感覚から割り出した上で、宇野が長年にわたり(1936-1944、1946-1959)編集したファッション雑誌『スタイル』の誌面を検討するものであった。文学者と美術家の両者に着目するのは、本研究の主旨に合致するものであり、時代的にも合致する例として、研究会で活発な議論がなされた。

2011度は4回の研究会を開催した。平成23年6月18日筑波大学において、研究計画に基づいて、川畑直道氏(デザイン史研究者、グラフィックデザイナー)とともに研究会を開催した。共同研究員江口みなみがドイツ・ワイマールでのデザイン史学会において行った発表を基にして、バウハウスに学んだ山脇道子について話題提供を行った。江口の発表は、日本からニューヨークを経由してバウハウス、そして帰国という各段階における山脇のファッションを子細に検討して、そこに美術家・デザイナーとしての成長の跡を探るものであった。研究会では生前の山脇道子と親しく接したこともある川畑氏から山脇道子のみならず、バウハウス学生の生活等についてのコメントがあった。とりわけ、帰国後の山脇道子の存在は、資生堂の個展などを通して、大きな影響力があり、本研究にとって重要な事象と位置づけることができる。

つぎに10月1日に、筑波大学において、現代美術家のやなぎみわ氏とともに研究会を開催した。やなぎ氏は前年8月京都国立近代美術館において築地小劇場に着目した三部作による演劇活動を開始したところであり、本研究の主要な研究対象である村山知義に関心を寄せている。研究会においては、氏の視点からドイツ留学後に築地小劇場を開設した土方与志を中心にして話題提供があった。氏の参加により、本研究の課題がもつべき現代性という側面が自ずと浮かび上がった。

ついで、11月13日には、筑波大学において、日本美術研究者クリスティン・グース氏 Dr. Christine

Guth (Tutor, Royal College of Arts) とともに研究会を開催した。グース氏の話題提供は、Transnational Perspectives on Fashion 1880s-1920sと題したものであり、日本美術愛好者として知られるボストンのイザベラ・ガードナーのファッションへの並々ならぬ関心について論じるとともに、最近発掘した資料の一部とともに、大震災後に来日したデニシオン舞踊団のダンサーについて言及した。とくにそれまで研究会で話題とならなかったファッションのコレクターという存在に着目するものとして、活発な議論がなされた。

第4回目として、12月17日に、筑波大学において、山口恵理子氏(筑波大学准教授)と齊藤祐子氏(近代日本彫刻史研究者)を迎えて研究会を行った。イギリス美術史に造詣が深い山口氏はラファエロ前派と明治美術との深い関わりについてファッションを視点にすえ、一方齊藤氏は村山知義とも関わりがあった彫刻家荻島安二とマネキンとの関係について、それぞれ興味深い話題提供を行った。近代日本における美術家や文学者にとって、海外の尖端的な現象は絶えず参照すべき枠組みとして機能したが、ヨーロッパの「過去」(たとえば中世主義)もまたそれとともに刺激を与えたことは見逃せない。また、ファッションと不即不離の関係にあるマネキンは美術家にとっては、人形の問題とともに、重要な研究対象として存在していることを再認識した。

また2月10日―11日にわたり、共同研究員全員で、近代日本の美術と社会を考える上で重要な竹久夢二について金沢湯涌夢二館において「ファッションリーダー〈夢二式〉―明治・大正、キモノの魅力」展、さらに展覧会「中国近代絵画と日本」展(京都国立博物館)を観覧し、関係資料を収集するとともに、同展関連事業の国際シンポジウム「中国近代絵画の形成と日本」(京都国際会議場)に参加して、中国の近代美術史研究者と若干の研究交流を行った。

2012年度は6月、12月、2月と3回の研究会を開催した。当初は中国人近代美術史研究者を招聘し、とりわけ上海等における1920年代30年代の美術家とファッションに関係について議論をする予定であったが、実現しなかった。第1回は6月16日に筑波大学において水谷真紀氏(東洋大学非常勤講師)とともに開催した。水谷氏より都市モダニズムと女性像をめぐる文化学院と落谷虹児を中心にして話題提供があり、これについて討論を行った。モダンガールは大正期から昭和初期にかけての典型的な都市風俗であるが、そこには「良妻賢母」という規範を背景にした対抗文化の側面があった。モダンガールが生まれる場となった文化学院が占める文化的な位置づけを再確認することになった。また、挿絵画家として人気を誇った落谷虹児が関係した『令女界』誌の仕事からは、東京ではなく、はるか遠方の「パリ」という、より国際化した次元で出現するモダンガールの姿とそのファッション(この場合はガルソンヌ)が見えてくる。

つぎに12月22日に筑波大学東京キャンパスにおいて金子隆一氏(東京都写真美術館専門調査員)による話題提供「カメラと身体」をえて、写真家とファッションについて討議をおこなった。金子氏から提示された重要な視点は、ファッションを考える場合においても、カメラ機材の問題が避けて通れないということである。機材一切合切を運んで撮影現場へ向かう時代と、小型カメラを手にして題材を追い求める時代では自ずとカメラマンの身体の動きがかわり、ファッションも変化するということである。

最後に本共同研究を締めくくるため、2月2日筑波大学において、公開のシンポジウム「アーティスト・ファッション・パフォーマンス:近代日本芸術モダニズムにみる」を開催した。内容は滝沢恭司による発表「1940年代の美術家とファッション―民藝運動の作家をめぐる」、喜多孝臣「断裁の美学―昭和初期の葉巻服と芸術の結びつきについて」を第一部において行い、続いて第二部においては、まずやなぎみわ氏(美術作家)によるプレゼンテーション「1924 三部作について」があり、つづいてこれを題材として、やなぎ氏、井上理恵氏(演劇史研究者)、國吉和子氏(舞踊評論家)、そして司会として五十殿が加わり、討

論を行った。滝沢の議論は、民藝運動に関わった作家たちにも、おのずと生活の場面場面で、作務衣でいたり、あるいは外出にはスーツであったりしたというもので、この運動がモダニズムとは無縁でないと指摘する。この文脈において滝沢はまたスリーピースのスーツの着用についても注目している。喜多はプロレタリアが着用するファッションとしての菜葉服、烏打帽、坊主頭について論じて、それが労働者に限定されずに、芸術家、さらには一般社会でも流行した現象を取り上げ、そこに「裁断の美学」(新居格)を見ている。最後に、本共同研究の期間中、期せずして村山知義の本格的な回顧展が開催されたが、この展覧会の関連事業として実施されたやなぎみわ氏の三部作「1924」は本共同研究を啓発する演劇作品であったので、村山の活動に詳しい演劇と舞踊の研究者にも参加を求めて、やなぎ氏の創作を検討し、演劇とパフォーマンスの相違、歴史的な人物とフィクションの問題など、さまざまな論点から議論を行うとともに、今後の研究の展望を見出すことに努めた。

本共同研究は各自の論文 1 編を掲載した研究報告書を発行した。このうち、鈴木貴宇「サラリーマンとモダンガールの恋——昭和初期のモダニズム文学に見る洋装表象」、喜多孝臣「断裁の美学—昭和初期の菜葉服と芸術の結びつきについて」はそれぞれ初出となる論文である。

#### [研究活動の成果]

活動成果については、設定した総ての目標を必ずしも達成したとはいえないが、着実な研究を積み重ねたと考える。とくにこれまで美術史や文学史において個別的な事象としてみられたことを、共同研究として取り上げ、共同研究員のみならず、研究会参加者においても、美術家や文学者の創作活動とファッションとの強い関連そしてその社会的・歴史的な意義を認識したことは今後の研究の展望という点を含めて、有意義であった。そして、以下にみられるように、共同研究として設定した目的に即して研究員が研究会等で調査報告を行い、あるいは話題提供を受けて討議した内容を活かした所見を得ることになった。

共同研究の成果として確認できたことを要約するならば、トビー・スレイド氏によって指摘されたことであるが、日本近代における、実用的な機能に限定されない、「美的」な社会的な存在、さらにいえば制度としてのファッションという視点である。それだからこそ、美術家(に限られないが)の衣服が美的な表現として、そしてまた社会的な意義のあるものとして議論されることが可能となったといえる。いまひとつ、本研究は日本近代を対象として積極的に国外(欧米、そして旧植民地)への／からの視線を考慮して進めた。

・1920年代前半、最もアクティブに、過激に活動し、新興美術運動を牽引した美術家は村山知義だった。そのことは、当時の村山が、怪童、帝王者、近代人の代表者、曲者、街のプリンス、才人、現代の若きレオナルド・ダ・ヴィンチ、モダニティーのチャンピオンなどと呼ばれていたことからもうかがい知れる。その一方で、そのような呼称を与えられた村山の評価が、美術や演劇といった芸術分野での尖端的で驚異的ともいえる旺盛な創作・発表活動に加えて、家庭生活や住居、ファッションの特異性によってもたらされたものであったことが予想され、「1920年代前半期のアヴァンギャルドとファッション」をめぐる調査・研究の対象として村山知義を取り上げることが、本研究にとって最も大きな成果を得ることにつながると判断した。その結果、資料や作品の調査・考察、研究から、村山のファッションで注目すべきことは、おかつぱヘアとニット帽、そしてルパシカの着用であることが明らかになった。

とくに、おかつぱヘアにつばの狭いニット帽を被るという、大正時代には珍しいカジュアルな、しかしスタイリッシュなファッションは、構成物やパフォーマンス、舞台装置や建築などの村山の作品に通じる、アヴァンギャルドとしての造形思想を反映した、身体による造形表現のひとつと見なすことができた。また、お

かっぱヘアは男子丸刈りが美德とされ、長髪が左傾化のサインと見なされて危険視されていた戦前の日本で、個性という観点から肯定的な意見が聞かれるようになった大正後期に登場した特異なヘア・スタイルであったが、村山は、マヴォイストら美術家のあいだではもちろん一般男子のあいだでもそのヘア・スタイルの増加、さらに男子長髪の増加をうながすほどのファッション・リーダーだったことが明らかになった。

・「官」主導で始まった日本の近代化が、大正デモクラシーを経て「民」のレヴェルにまで浸透した時期が 1920 年代であり、関東大震災はその速度をドラスティックに押し進めたとも言えよう。こうした文脈に即すると、従来では軽佻浮薄なアメリカナイゼーションの表象として認識されていた「モダンガール」や「モダンボーイ」（「モボ・モガ」風俗）も、封建的な家族制度の撤廃を可視化する側面を有していたと考えられる。洋装は生活合理化という思想性をもはらんでおり、職業婦人として経済的自立を目指す、真の「近代的女性」像が「モガ」に投影されていたとも考えられるのだ。こうした見地から、昭和初期のジャーナリズムを賑わした作家イメージを分析すると、興味深い符牒が浮上する。断髪に洋装の女性が街路に進出するのは、震災から 7 年を経た 1930 年代のことだが、当時であって女流作家たちは最先端の職業婦人でもあった。その中でも、宇野千代とささきふさの二人は、自らのアイデンティティを洋装によって表現した女流作家として位置づけられよう。

調査を通じて明らかとなったことは、宇野千代の場合に顕著であるが、昭和初頭にあつて、洋装とは合理化の表徴としての側面だけではなく、女性のセクシュアリティをめぐる価値観をも反映する、極めて多相的な意味を有していた点である。それは、必然的に「良妻賢母」イデオロギーとの関連を内在化させ、洋装は時に「和服＝母」という規範からの逸脱を表象することになる。今後の課題としては、こうした価値観が洋装の普及する戦後の高度経済成長期にはどのような変容を見るにいたったか、を歴史的な視座の中で明らかにすることであろう。

・共同研究の成果を踏まえ、美術雑誌、文芸雑誌のほか、グラフ雑誌、婦人雑誌、漫画雑誌などから 1925～30 年代前半の芸術家のファッションを多角的に調査し、ファッションを手がかりに芸術家の美意識を考察した。そのうえで特に問題としたのが、当時の尖端的芸術家の間での菜葉服の流行である。

マルクス主義思想を積極的に受容し、ジャンル横断的な制作活動をおこなっていたプロレタリア美術運動の画家たちは、菜葉服を着た労働者像を多数描き、彼ら自身も鳥打ち帽や丸坊主といった労働者風の装いを好んで着用していた。また、築地小劇場では、菜葉服の労働者が登場する芝居が多数上演され、劇場関係者は築地帽と呼ぶ労働者風の帽子を愛用、プロレタリア演劇運動では、「メザマシ隊」という出演者全員が菜葉服を着用して公演をおこなう劇団までうまれている。こうした芸術家たちの装いによって菜葉服は小さなブームをよび、1930 年代頃には「マルクス・ボーイ」「エンゲルス・ガール」と呼ばれる菜葉服に身を包んだ若者が街頭を闊歩するようになった。調査の中で、菜葉服流行がこのようにひろがりを持っていたことが明らかとなった。さらに、1930 年頃には「マルクス・ボーイ」「エンゲルス・ガール」と呼ばれる菜葉服に身を包んだ若者が街頭を闊歩するようになった。調査の中で、菜葉服流行がこのようにひろがりを持っていたことが明らかとなった。

菜葉服流行の背景には、当初プロレタリア革命を志向するマルクス主義思想の影響のみが想定されたが、同時代の文献調査をすすめるなかで、評論家新居格の提唱する「断裁美学」にも流行を生み出した当時の美意識が反映されていることがわかった。彼は、「これまでの人類が加へ来つた無用の添附の代りに必要に即する断裁が新たな美の姿態として示形されやうとしつゝある」（「断裁美学の一提言」『近代生活』1 巻 5 号、1929 年 8 月）とし、機能性のみが重視され着用される労働服のなかに、「簡素な美」「断裁

の美」を発見している。こうした同時代の近代的美意識が、プロレタリア芸術家たちの葉葉服に焦点をあてた作品制作と労働者風の簡素な装いに通底していると考えられる。

・1930年代のモダニストのファッションに関して、ドイツとの関係を中心に考察を行った。とくにバウハウスに留学した山脇道子のファッションを中心に調査した。ドイツ人研究者エルケ・バイルフス Elke Beilfluss 氏から、バウハウスのマイスターや学生たちは、近代的で動きやすく、中性的なファッションを好んでいたことを教示された。研究成果としてドイツのデザイン史学会で口頭発表を行ったが、バウハウス・アーカイヴの연구원などから高い関心が寄せられた。これはドイツにおけるバウハウス研究が、近年、優秀な教育機関という単一的なバウハウス評価を脱し、フェミニズムや宗教、政治的側面からの多面的な分析を進めていることが背景にある。一方、山脇の帰国後の活動と役割について、川畑直道氏の教示により、ファッションというテーマだけでは捉えきれない日本のバウハウス受容の複合的な性質を認識することに至った。美術やデザイン、建築、写真、文学といった分野に携わったモダニストたちのファッション観あるいは生活スタイルが、相互に刺激を与え合いながら発展していったことから、デザインや建築の分野へ調査の視野を広げる必要性が明らかになった。

・柳宗悦、河井寛次郎、濱田庄司らが1920年代に開始し、1930年代後半から40年代にかけて活発な動きを見せ、飛躍的展開を遂げた民藝運動に注目し、この運動を推進した工芸作家のファッションを検討することで、戦時下に活躍した美術家の美意識・自尊心・アイデンティティの一例を再考した。柳宗悦ほか民藝運動の作家たちは、自宅内や制作時には作務衣や和装でいることが多かった。そのうち作務衣は、現代では陶芸家のファッションとしてそのイメージが定着しているように思われるが、それは1920年代から作務衣を愛用していた濱田庄司や河井寛次郎のファッションから広まり定着した可能性が考えられる。その一方で外出の際は、上着・ベスト(ウエストコート)・ズボンというスリーピース・スーツが多かった。スリーピースは昭和期に入って紳士の礼服としてホワイトカラーの労働者にも広がり、第二次世界大戦頃まではツーピースよりも一般的だったとされるが、柳や民藝の工芸作家がスリーピースを着用していたことは、紳士でありホワイトカラーであるという自意識・自尊心の現れであったと考えられる。一方で、スリーピース着用は、1920年にイギリスに留学した濱田はもちろん、柳や河井らも、その発祥国の国籍をもつ陶芸家で親しく交流したバーナード・リーチの影響が考えられる。

民藝運動は反近代思想や新日本主義・民族主義のもとに展開したとはいえ、大局的には西洋をモデルとしたモダニズム芸術運動としての性質をもつものであったといえる。こうした見方は柳や民藝作家の外出時のスリーピース・スーツというファッションからも裏づけられる。また1930年代～40年代は、作品や言説、そして作務衣などのファッションや住居などから、西洋モダニズムの上に東洋・日本へと向かう意識を重ね合わせた、日本的モダニズムへと向かう美意識の高まりを認めることができる。

## 主な発表論文等

[雑誌論文]

1. Toshiharu Omuka: The Avant-garde and Fashion Strategy in 1920s Japan: Not Living the "Artist" but Making a New Life, Journal of Korean Modern and Contemporary Art History, vol. 21, pp. 197-206 (2010)
2. 滝沢恭司：村山知義の生の哲学、京都国立近代美術館ニュース『視る』、459号、pp.2-4(2012)

[著書]

1. 滝沢恭司：アヴァンギャルドの「生活」と「作品」——村山知義一九二二——一九二七、『村山知義



劇的尖端』、森話社、pp. 75-118 (2012)

[図録]

1. 滝沢恭司: 小英雄はスタイリッシュ——ファッションに見るマヴォイスト村山知義の近代性、『すべての僕が沸騰する 村山知義の宇宙展カタログ』、神奈川県立近代美術館ほか、村山知義研究会編集、pp. 245-254 (2012)

[国際会議発表]

1. Minami Eguchi: Von einem japanischen Moga zur Neuen Frau. Wandel in Stil und Mode am Beispiel der Bauhuserin Mityiko Yamawaki, Gesellschaft fur Designgeschichte, Vierte Jahrestagung, Bauhaus-Universitat, Weimar(2011)

3. 滝沢恭司: 生の哲学と身体表現——村山知義のダンスとファッション』、村山知義展国際シンポジウム「呼びかわす身体 過去、現在、未来」、神奈川県立近代美術館 葉山 (2012)

[口頭発表]

1. 鈴木貴宇、浅井カヨ、やなぎみわ: モボ・モガと築地小劇場の時代／大正期のファッションと都市文化(鼎談)、神奈川県立近代美術館 (2011)

2. 滝沢恭司: 1940年代の美術家とファッション—民藝運動の作家をめぐって、本共同研究主催によるシンポジウム「アーティスト・ファッション・パフォーマンス:近代日本芸術モダニズムにみる」、筑波大学 (2013)

3. 喜多孝臣: 「断裁の美学—昭和初期の葉葉服と芸術の結びつきについて」、同上

[研究報告書]

1. 鈴木貴宇: サラリーマンとモダンガールの恋——昭和初期のモダニズム文学に見る洋装表象、本共同研究報告書「近代日本モダニズム芸術とファッションについての研究——1910年代—1930年代を中心に」、pp.15-22 (2013)

2. 喜多孝臣: 「断裁の美学—昭和初期の葉葉服と芸術の結びつきについて」、同上、pp. 23-33